

## 「卵の厚焼き」型表現について

著者	藤巻 一真
雑誌名	言語教育研究
号	32
ページ	25-47
発行年	2021-11
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00001825/">http://id.nii.ac.jp/1092/00001825/</a>

# 「卵の厚焼き」型表現について\*

藤巻 一真

## 要 旨

本稿では動詞の連用形が関与し「XのY+V（連用形）」の形式を持つ「卵の厚焼き」型表現を「厚焼きの卵」型と区別して、その基本的な特徴を明らかにし、どのような条件下でそれが可能になるかについて論じる。まず、藤巻（2018）の「たて」節と呼ばれる表現形式および主要部内在型関係節と比較を行い、「たて」節と同様に、「卵の厚焼き」型表現にも主語と述語の関係が関与していることを示す。次に、杉岡（1998）、伊藤・杉岡（2002）の動詞由来複合語の分類を基本とし、由本（2017）により追加提出されたものも含めて動詞由来複合語のタイプごとに「卵の厚焼き」型表現の可能性について観察する。そして、それが可能な例において、Pustejovsky（1995）のクオリアを用いた由本（2017）の分析に基づき分析を行い、動詞のLCS（語彙概念構造）がXの主体役割に組み込まれることにより「卵の厚焼き」型表現が可能になっていることを示す。

## 1. はじめに

アスペクト形式の「たて」と「かけ」は以下のような動詞の連用形に接続し全体として、主語の属性を表す述語になることができる。益岡（2008）でいう「属性叙述」になる。例えば(1a)では、「焼きたたてだ」が述語であり、主語である「このパン」の属性を表している。

- (1) a. このパンは焼きたたてだ。
- b. この原稿は書きかけだ。

---

\* 本研究は神田外語大学言語教育研究所の研究助成を受けている。また本稿は長谷川信子先生を中心とした言語学の研究会にて発表した。参加者の皆さんに感謝申し上げます。特に長谷川信子先生を初め栗原和生氏、外崎淑子氏から貴重なご意見を頂いた。ここに記して感謝申し上げます。本稿における誤り等は全て筆者に責任がある。

また、(1)を基本とし、「V かけ／たての X」の形式をとり、(2)のように名詞修飾にも用いることができる。これらは、それぞれ「たて」構文、「かけ」構文と呼ばれている<sup>1</sup>。この(2)と同様の意味を持ちながらも「焼きたて」と「パン」の語順を入れ替えて、(3)のように「X の V かけ／たて」のように表現することも可能である（藤巻(2018)）。

- (2) a. 太郎は焼きたてのパンを3つ食べた。
- b. 太郎は書きかけの原稿に3カ所手を入れた。
- (3) a. 太郎はパンの焼きたてを3つ食べた。
- b. 太郎は原稿の書きかけに3カ所手を入れた。

例えば(3a)の「パンの焼きたて」であるが、(2a)の「焼きたてのパン」と同様に、全体として「パン」と解釈される点が、興味深い点である。形式的には、本来(1)で示したように述語である「焼きたて」が、修飾すべき名詞である「パン」の後ろに現れている。それにも関わらず、全体としてその前にある「パン」を表すのである。

ここで「たて」や「かけ」以外の動詞の連用形に、(3)のような「X の Y+V (連用形)」型の表現形式で全体として X と解釈され得る使用方法があるのではないかという問いが生じる。全ての動詞の連用形にこの使用方法があるわけではないが、(6)に挙げた「卵の厚焼き」や「トマトの輪切り」のような例がある。これらも、「たて」や「かけ」のときと同様に、まず(4)の「厚焼きだ」や「輪切りだ」のように述語として用いることができる。これらを元に(5)のように名詞修飾に用いることができる。さらに(6)のように動詞の連用形が名詞の後ろに来ることも可能である。この「卵の

---

<sup>1</sup> 「かけ」については、どのようなタイプの動詞が「かけ」とともに用いることができるかという問題および「かけ」の解釈などについて、多くの研究がなされてきた。Kishimoto (1996)、岸本 (2000)、高見・久野 (2006) などとそれらの参考文献を参照されたい。「たて」構文については山田 (2005) を参照されたい。

厚焼き」と「トマトの輪切り」は、それぞれ「卵」と「トマト」であり、その属性（状態）が「厚焼き」と「輪切り」であり、そういう「卵」と「トマト」を表している。

- (4) a. この卵は厚焼きだ。  
b. このトマトは輪切りだ。
- (5) a. 太郎は厚焼きの卵を食べた。  
b. 太郎は輪切りのトマトを食べた。
- (6) a. 太郎は卵の厚焼きを食べた。  
b. 太郎はトマトの輪切りを食べた。

本稿では(6)のように「XのY+V（連用形）」が、全体として名詞（X）と同じ解釈になる例を、藤巻（2018）の「たて」節や「かけ」節に倣い、「卵の厚焼き」を代表として「卵の厚焼き」節と呼ぶことにする<sup>2</sup>。

この「卵の厚焼き」節について、管見の限り、「たて」節および「かけ」節（以後まとめて「たて」節と呼ぶ）同様に、これまでにあまり取り上げて分析されてこなかったように思われる。そこで、本稿では、これを取り上げ、その基本的特徴について記述し、どのような仕組みが関与し、どのような条件でそれが可能になっているのかについて考察する。以下、2節で、「卵の厚焼き」節の特徴を「たて」節および主要部内在型関係節と比較しながら明らかにする。次に3節において、まず、どのタイプの動詞由来複合語が、「卵の厚焼き」節の元となる「XはY+Vだ」としての使用が可能になるのかについて、動詞由来複合語について詳しく分析した杉岡

---

<sup>2</sup> 「XのVたて」「XのVかけ」「XのY+V（連用形）」の形式を、ここでそれぞれ全体としてはXを表すのに「節」と呼ぶのは、後述のように、その背後に「XはVたてだ」「XはVかけだ」「XはY+V（連用形）だ」のように、主語と述語の関係が見て取れるからである。また、「たて」節と「かけ」節は、動詞（V）を取ることでYも動詞であり「XのV（連用形）+V（連用形）」となっている。

(1998)、伊藤・杉岡 (2002) を中心に概観する。これを元に、どのタイプの「X は Y+V だ」が「卵の厚焼き」節になるのかについて見てみる。次に 4 節で杉岡の分析の問題点を指摘し、それを取り込む形でクオリアによる分析を行っている由本 (2017) の分析を用いて、「卵の厚焼き」節の分析を試みる。5 節でまとめと今後の課題を述べる。

## 2. 「卵の厚焼き」型表現の特徴：主述関係を中心に

筆者は藤巻 (2018) において(3)の「パンの焼きたて」「原稿の書きかけ」のタイプをそれぞれ「たて」節、「かけ」節と呼んで、(2)の「焼きたてのパン」や「書きかけの原稿」のタイプと区別をした上で、主要部内在型関係節と比較しながら、それらの統語的、意味的特徴について分析を行った。本節では、「卵の厚焼き」節について、「たて」節および主要部内在型関係節と比較し、主語述語の関係が関与することを示す。

まずは「卵の厚焼き」以外に可能な例を、(7)にいくつか挙げる。もともとそれほど生産性は高くないが、料理の方法とその食べ物によく見られるものである。これらと比較する「たて」節であるが、(8)のような例がある。(「たて」節の例は藤巻 (2018) より一部掲載。)

- (7) a. 大根の天日干しが 10 本軒下にぶら下げてあった。  
b. 太郎は茄子の油いためをたくさん作った。  
c. 太郎はキャベツの千切りが好物だ。
- (8) a. 花子はメロンパンの焼きたてを口にほおぼった。  
b. 花子はセーターの編みかけを隠した。

まず、両者の共通点として、(9)のように「X の + 動詞 + たて / かけ」において

「X の」を省略することはできないが、これと同様に(10)においても「X の」を省略することはできない点が挙げられる<sup>3</sup>。

- (9) a. 花子は\* (天ぷらの) 揚げたてに手を伸ばした。  
b. 花子は\* (原稿の) 書きかけに手を入れた。
- (10) a. 太郎は\* (卵の) 厚焼きを食べた。  
b. 太郎は\* (トマトの) 輪切りを食べた。

これは、「たて」節および「卵の厚焼き」節の背後には、(11)と(12)で示すような主語（「X が」と述語（「V たてだ」「V かけだ」「Y+V だ」）の関係があるからである。例えば、(10a)の「卵の厚焼き」の背後には(12a)の「卵が厚焼きだ」が存在し、同時にそれは全体（「卵の厚焼き」）で「厚焼きの卵」を表すという関係になっているということである。

- (11) a. \* (天ぷらが) 揚げたてだ。  
b. \* (原稿が) 書きかけだ。
- (12) a. \* (卵が) 厚焼きだ。  
b. \* (トマトが) 輪切りだ。

(12a)において主語の「卵が」と述語の「厚焼きだ」が省略できない。仮に「卵の厚焼き」においても(12a)と同様の叙述関係があるのであれば、主語にあたる「卵の」も省略できないということになる。

---

<sup>3</sup> ただし、もともと動詞の連用形が単独で、道具などの物を表す場合（「はかり」や「はたき」など）があるので、その場合は、「X の」は不要となる。また動詞が内項と動詞由来の複合名詞を形成するとき、「梅干し」「野菜炒め」「卵焼き」のように具体的なものを表すことや、「ねじ回し」「爪切り」など道具を表すことがある（伊藤・杉岡 2002）。注 9 も参照されたい。これらの場合、「X の」が不要となるので、ここでの「卵の厚焼き」節とは異なる。

次に、(10)の「卵の厚焼き」節は、時制節ではないが主要部内在型関係節と似ていると言える。例えば、(13b)の主要部内在型の関係節内では、主語の「卵」が「厚焼き」の状態にあることを叙述しているが、主要部内在型関係節全体としては、「卵」を表す状況になっている<sup>4</sup>。

(13) a. 太郎は\* (パンが) 焼きたてなのを3つ食べた。

b. 太郎は\* (卵が) 厚焼きなのを3つ食べた。

この主要部内在型関係節内において、主語の「パンが」や「卵が」は、省略できない。これと同様に(10)の「卵の」や「トマトの」も省略できない。つまり、(10)の「卵の厚焼き」および「トマトの輪切り」は、全体として、(13)と同様にそれぞれ「卵」と「トマト」になっているということである。そうであるとすると「卵の厚焼き」においては「卵」が主要部になっている可能性が考えられる<sup>5</sup>。

次に主要部内在型関係節においてはガーノ交替が可能であるが、他の構文（「たて」節や「卵の厚焼き」節）においてはガ格が不可能である<sup>6</sup>。

<sup>4</sup> 主要部内在型関係節については多くの研究がなされている。長谷川（2002）、黒田（2005）、三原（1994）などそれらの参考文献を参照されたい。また、「卵の厚焼き」節は、Tonosaki（1996）の言う「状態変化主要部内在型関係節（change of state head-internal relative clause）」の例を元に「おたまじゃくしの蛙になったのが3びき庭を跳ねている」との比較もすべきであるが今後の課題とする。

<sup>5</sup> この可能性に関して、一見、問題と思われる例がある。「きゅうりの輪切りを3枚手で取った。」と言えるのに対して、「きゅうりの輪切りを1本手で取った。」とは言いにくい。これについては「輪切りのきゅうりを3枚手で取った。」と言えるのに対して、「輪切りのきゅうりを1本手で取った。」と言いにくいと同様であろう。そうであるとすると「輪切りのきゅうり」の主要部が「きゅうり」であるのと同様に、「きゅうりの輪切り」においても「きゅうり」が主要部であると言えることになる。この点は、黒田（2005）のノ関係節（例「太郎が大きな林檎の赤いのを取って食べた」）において、ノ格名詞句（「林檎の」）が主要部であるとの論に通じ興味深い点であるが、ここではこれ以上は立ち入らない。

<sup>6</sup> ガーノ交替については、Harada（1971）などを参照されたい。また、黒田（2005）は、ノ関係節を主要部内在型関係節とは別のものとしているので、(15)の「卵」がガ格の場合とノ格の場合ではもともと異なる関係節となる。

- (14) a. 太郎は卵 {が／の} 食べかけなのを手にとって食べた。  
 b. 太郎は卵 {\*が／の} 食べかけを手にとって食べた。
- (15) a. 太郎は卵 {が／の} 厚焼きなのを手にとって食べた。  
 b. 太郎は卵 {\*が／の} 厚焼きを手にとって食べた。

ここで、次のような可能性が浮かぶ。(15b)の「X の Y+V」は主要部内在型関係節の「X の Y+V なの」の「なの」の省略された形ではないかという可能性である。例えば、(16a)から「なの」を省略して(16b)を派生したのではないかというものである。

- (16) a. 太郎は卵の厚焼きなのを手にとって食べた。  
 b. 太郎は卵の厚焼き~~なの~~を手にとって食べた。

仮にそうであるとする、まず、「卵の厚焼き」節において「卵が厚焼きなの」から「なの」を省略して、(15b)の「卵が厚焼き」と言えないことを説明しなければならない。さらに、「X が Y+V だ」が可能なものは基本的には「X の Y+V なの」と言えるので、全てが「X の Y+V (が・を・に・から)」と言えるはずであるが、「卵の厚焼き」節には(17b)のように不可能な場合があり、それは「X が Y+V だ」が可能なものの一部でしかない。つまり、「X が Y+V だ」といえる動詞由来複合語 (Y+V) に、さらに何らかの条件がかかっているのである。そうであるとする、何故「なの」を省略するとその条件がかかるのかを説明しなければならない。したがって、ここでは、「卵の厚焼き」節を主要部内在型関係節から「なの」を省略したものとはせず、話を進めることとする。

- (17) a. 太郎は子どもの親思いなのから手紙をもらった。  
 b. \*太郎は子どもの親思い~~なの~~から手紙をもらった。



以上、「たて」節および主要部内在型関係節と比較しながら、「卵の厚焼き」節に主語と述語の関係が関与することを中心に見てきた。

### 3. 「卵の厚焼き」節が可能な動詞由来複合語

この節では、「卵の厚焼き」節である「XのY+V」が派生される元の表現形式である「XはY+Vだ」となる動詞由来複合語にはどのようなタイプのものがあるかについて、杉岡（1998）（とその分析を引き継ぐ伊藤・杉岡（2002））を中心に概観する。また、その中でどのタイプが「卵の厚焼き」節が可能であるかについて観察する。

その前に、複合語においては特殊な例とされる「外項複合語」が属性を表す述語となる場合があること（影山（2006））を見ておく<sup>7</sup>。（以下のbの例は影山（2009）より）

(18) 外項複合語：

- a. このホテルは安藤忠雄氏設計だ。
- b. あの映画はスピルバーグ監督制作です。

(18a)においては「安藤忠雄氏」が「設計」の外項であり、「安藤忠雄氏がこのホテルを設計した」における主語に当たる。(18)の例は、外項を複合語に取り込んでいて、属性叙述になっている（影山（2006, 2008, 2009））。次に内項と付加詞の複合について杉岡（1998）および伊藤・杉岡（2002）における杉岡のデータと分析を少し詳しく見ておく。

---

<sup>7</sup> 影山（1993:50）では非対格自動詞の主語も含めて、動詞の内項を複合することは可能であり、外項が動詞に複合されることは除外されている。「外項複合語」の詳細については影山（2006）を参照されたい。

### 3. 1 「XはY+Vだ」が可能な動詞由来複合語

まず、杉岡（1998）、Sugioka（2001）、伊藤・杉岡（2002）では、動詞由来複合語について、内項が動詞の連用形に組み込まれた複合語と、付加詞が動詞の連用形に組み込まれた複合語を区別し、それぞれが形成されるレベルが異なると分析されている<sup>8</sup>。前者の動詞由来複合語は、(19)にある意味を表す。内項との複合の場合、行為や現象を表すものは、(20)のように「する」と直接結合することではなく、「{を／が}する」となり、格助詞を要求するとされる。（杉岡・伊藤（2002）より一つずつ例を掲載）

(19) 行為：山登り、現象：雨降り、動作主：風船売り、道具：ねじ回し、特徴：物知り、場所：もの干し、時間：夕暮れ

(20) 魚釣り\*（を）する、胸騒ぎ\*（が）する

これらの中に「ねじ回し」や「風船売り」のように、初めから物や道具や人を表すものがある<sup>9</sup>。これらはそれ自身が物や人を表していて、「XのY+V」タイプをつくらないので、ここでの考察対象からは外すこととする。内項との複合語で本稿と関係するものとして、(21b)のように「特徴」を表し、状態を表す述語となる「父親似」などがある<sup>10</sup>。

<sup>8</sup> 前者は項構造で、後者は以下に見るように LCS での基本述語に関連するため、項構造では説明がつかず、LCS で形成されるとされる。また、動詞の連用形が持つ様々な意味については西尾（1961）も参照されたい。

<sup>9</sup> 以下の(i)は、道具の例である。また、(ii)のように、もともと結果産物を表す動詞由来複合語もあり、(iii)のように説明している。

(i) ねじ回し、霧吹き、栓抜き、日除け、眼鏡ふき、水かき、爪切り、ひげ剃り、帯留め、鍋つかみ、えんぴつ削り、インク消し、郵便受け、水入れ、箸置き、小銭入れ（伊藤・杉岡（2002: 110-111））

(ii) 梅干し、宛名書き、人相書き、効能書き、筋書き、野菜いため、卵焼き、石組み、らっきょう漬、わさび漬（伊藤・杉岡（2002: 128））

(iii) この種の複合語は、数も少なく、上に述べたように語彙化されているものが多いので、動詞由来複合語に含めるよりも、普通の名詞修飾と考えた方がよいと思われる。（伊藤・杉岡（2002: 129））

<sup>10</sup> これらの特徴は、人間の永続的な特徴を表しているとされる。（伊藤・杉岡（2002: 112-113））

- (21) a. \*太郎は親思い／物知り／父親似する。  
b. 太郎は親思い／物知り／父親似だ。

次に、付加詞と動詞が結合する場合であるが、基本的には述語になり、(25)にあるように「する」と直接結合し動詞となるか、「だ」と結合して状態を表す名詞述語となるとされる。以下は、付加詞がどのような意味役割を負っているかによる分類である。

(22) 付加詞を含む 付加詞の意味的分類

- a. 道具：ワープロ書き、のり付け、機械編み、手作り、水洗い
- b. 様態：一人歩き、若死に、早食い、立ち読み、がぶ飲み
- c. 原因：船酔い、所帯やつれ、仕事疲れ、霜枯れ、飢え死に
- d. 結果状態：黒こげ、びしょ濡れ、薄切り、四つ割り、白塗り
- e. 材料：石造り、板張り、木彫り、モヘア編み、毛織り

(伊藤・杉岡 (2002: 115))

杉岡(1998)では、これ以外に「場所」や「時間」なども挙げている。(以下の例は、杉岡(1998)より一部掲載)

- (23) 場所：田舎暮らし、着点：図書館通い、  
起点：会社帰り、時間：三月生まれ (杉岡 (1998: 342-343))

本稿と関係するのは、主語の属性を表し、「～だ」となり述語となるものである。

(24)にあるように付加詞の意味からすると典型的には「結果状態」を表すもの(Yが形容詞の場合)があるが、それ以外にも(25b)のように「道具」「材料」や「場所」な

ども状態を表す述語となるとされる<sup>11</sup>。

(24) 四つ割り、薄切り、輪切り、厚焼き、固ゆで（だ）

(25) a. 太郎はセーターを水洗いした。

b. このセーターは機械編みだ。

杉岡（1998）は「する」が付き行為を表す動詞になるか、「だ」が付き状態を表す名詞述語になるかは、付加詞が(26)にある LCS（語彙概念構造）のどの基本述語を含む事象に選択されているかによるとしている<sup>12</sup>。

(26) [[x ACT (ON y) ] CAUSE [y BECOME [y BE AT [ (IN/ON/WITH) z]]]

付加詞がどの基本述語に選択されるかは、伊藤・杉岡（2002: 117）によると以下のようになっている。

(27) a. ACT : 「する」（道具、様態）

動作を遂行するための道具（手段も含む）と、動作の様態を表す付加詞を選択する。

b. BECOME : 「なる」（原因）

その変化を引き起こす原因を付加詞として選択する。

c. BE : 「だ」（結果、材料）

---

<sup>11</sup> 「道具」は単純な活動動詞にも選択されるが、作成動詞にも使役変化動詞によっても選択可能である。「手洗い」は活動動詞の例で、「手づくり」は作成動詞の例で、「オープン焼き」は使役変化動詞の例である。「材料」は、作成動詞「作る」「編む」「織る」などの材料で、産物の組成を表し、結果状態の一部と考えられている。「材料」は「結果状態」と同様に BE によって選択される。

（伊藤・杉岡（2002: 120）

<sup>12</sup> 「する」が可能な場合は、複合名詞が[+V]の素性を持ち、「だ」が可能な場合は、複合名詞が[-V]の素性を持つと分析されている。

結果状態を修飾する結果述語と材料を付加詞として選択する。

(伊藤・杉岡 (2002: 117))

例えば、付加詞が ACT に選択される「様態」「道具」「場所」「時間」などは、「手作りする」のように「する」とともに動詞となる。また、付加詞が BECOME に選択される「原因」も「日焼けする」のように「する」とともに動詞になる。一方で、BE とともに現れる「結果状態」や「材料」は、「黒こげだ」「石造りだ」のように「だ」とともに状態を表す述語となると分析されている<sup>13</sup>。

また、「～する」と「～だ」の両方が可能なものものがある。「道具」「様態」が付加詞であり、作成・使役変化動詞と複合した場合に限られるとされる。(28)では、「作る」は作成動詞で両者が可能であるが、(29)では「洗う」が動作動詞なので状態述語にならないとされる。(「荒削り {する/だ}」は様態と使役変化動詞の例である。)

(28) a. 太郎はおもちゃを手作りした。

b. 太郎のおもちゃは手作りだ。

(29) a. 太郎はセーターを手洗いした。

b. \*太郎のセーターは手洗いだ。

(28)において「X は Y+V だ」が可能なのは、「Event2 (動作) に焦点がある作成・使役変化の LCS において、結果事象に焦点を移動させる操作が働いていて、そのために、Event2 (動作) によって選択されている道具が、あたかも結果事象を修飾しているかのような解釈が可能になっている (p.121)」ためであると説明されている<sup>14</sup>。

<sup>13</sup> 「焼ける」と「こげる」はどちらも状態変化動詞であるが、付加詞がこれらの動詞との関係で、どの意味なのかによって、BECOME に選択されるか、BE と述語の一部になるかが決まるとされる。

<sup>14</sup> この結果事象に焦点を移動させる操作については、Result Focus Rule という以下の操作を仮定している。

以上、「X は Y+V だ」と言えるタイプの動詞由来複合語 (Y+V) は、内項を複合する場合の一部と、付加詞を複合する場合の「結果述語」や「材料」が複合された場合を基本とし、動詞が作成・使役変化動詞であり焦点が BE に移行する場合の「道具」と「様態」も焦点の移動とともに、それが可能であることを見た。

### 3. 2 「卵の厚焼き」節が可能な「XはY+Vだ」のタイプ

前節の分類をもとに、「X は Y+V だ」が可能な動詞由来複合語のうち、どのような Y+V において「卵の厚焼き」節が可能になるかを見てみる。

まず、先にも述べたが「卵の厚焼き」節はそれほど生産性が高くないが、比較的多く見られるのが、(30)のように食べ物に典型的な調理方法としての状態変化動詞を用いた場合で Y がその「結果状態」を表すものである。また、(31)は Y が「道具」の例である。

- (30) a. 太郎は卵の固ゆでを食べた。  
b. 太郎はだし巻き卵の厚焼きを食べた。  
c. 太郎はピザの薄焼きを食べた。

「～の状態に V する」: 「固くゆでる」「厚く焼く」「薄く焼く」

- (31) a. 花子は野菜の油炒めを食べた。  
b. 花子は魚の天日干しを食べた。

---

#### (i) Result Focus Rule:

[ACT x, y (Instrument)(manner)<sub>Effect</sub>[BECOME y [BE y AT-Z]]

→ [BE y AT-Z, by [ACT-ON x, y (Instrument) (Manner)]] (杉岡 (1998: 357))

この LCS において、基本述語の ACT と BE が含まれていることが、この規則が適用される述語の条件となる。つまり、作成動詞・使役変化動詞ということになる。

また金水 (1994) においては、連体修飾の「～タ」について考察を行い、形状動詞の一部に「語彙概念構造に作用することによって派生するものがある」として、「動詞の語彙概念構造から、(あれば) 結果の状態 (STATE 節点以下) を「焦点化」せよ。(p.40)」という規則を挙げ、動詞本来の語彙概念構造以外に、状態述語としての概念構造が派生されるとしている。詳しくは金水 (1994) を参照されたい。

- c. 花子は貝の酒蒸しを食べた。
- d. 花子はきゅうりの塩もみを食べた。

「～でVする」: 「油で炒める」「天日で干す」「酒で蒸す」「塩でもむ」

また、次のように内項の例も可能である。(32)は、「湯に通す」「糠に漬ける」が基本となっているので、内項(「場所」)を複合している例と言える<sup>15</sup>。ただし、同じ内項でも(33)のようなものは難しいと思われる。

- (32) a. 太郎は野菜の湯通しを食べた。
- b. 太郎はきゅうりの糠漬けを食べた。
- (33) a. \*太郎はこどもの親思いから手紙をもらった。
- b. \*太郎は学生の物知りから難しい質問を受けた。

次に、属性叙述となる外項複合語から「卵の厚焼き」節が可能かどうかであるが、(34)のように不可能であろう。また、「材料」が複合されたものは、(35)のように「卵の厚焼き」節にならないようである。次に「場所」「時間」であるが、(36)のように、難しいように思われる。

- (34) a. \*太郎はホテルの安藤忠雄氏設計に宿泊した<sup>16</sup>。
- b. \*太郎は映画のスピルバーグ監督制作を3本連続で見た。
- (35) a. \*太郎は庭の石造りに手を入れた。
- b. \*太郎は床の板張りにカーペットを敷いた。
- (36) a. \*太郎は学生の田舎暮らしと話をした。

<sup>15</sup> 次節の由本(2017)の三項動詞の例である。

<sup>16</sup> 「設計」や「制作」は動詞の連用形ではないが、「卵の厚焼き」節が可能かどうかをここでテストしている。

- b. \*太郎は学生の3月生まれと親しくなった。

#### 4. クオリアによる「卵の厚焼き」節の分析

前節での分類を受けて、本節では、由本（2017）のクオリアの分析を用いて、「卵の厚焼き」節の分析を試みる。

##### 4. 1 由本（2017）

由本（2017）は、動詞由来複合名詞による属性描写に焦点をあて、述語名詞による属性描写に見られる多様性を明らかにしている。由本が挙げるその多様性とは、以下の例であり、前節の杉岡（1998）における内項と付加詞の区別では捉えることができないものが含まれる。(37)は内項を含んだ例である。(由本（2017: 271-272）から一部を抜粋) これらは、いずれも(38)のように「XはY+Vだ」が元にある。

- (37) a. 箱入りの本、フランス帰りの女優、殻付きの落花生  
b. 瓶詰めのジャム、蔵出しの酒、シロップがけのかき氷
- (38) a. その本は箱入りだ。 ← 「箱入りの本」  
b. そのジャムは瓶詰めた。 ← 「瓶詰めのジャム」

(37b)のように、元の動詞が三項動詞の場合は、一つ内項を複合してももう一つの項が叙述の対象として現れることができる。例えば、「詰める」や「かける」は、内項として二つ項を取る三項動詞である。

また、複合語の内部に含まれる名詞のN自身が新たな項を要求するタイプのものがある。(以下の例は、由本（2017: 277）から抜粋)

- (39) a. 先割れ (のスプーン)、期限切れ (のカード)



- b. (景気が) 先細りだ、(質問が) ピント外れだ

例えば「先割れ」は、以下のようにすでに「先」という項が「割れ」に複合されているので、それ以上「割れる」の項はない状況であるが、(40b)のように主語となっている項(「そのスプーン」)をもう一つ取っている。

- (40) a. そのスプーンの先が割れている。  
b. そのスプーンが先割れだ。

このように「先」のように N 自身がもう一つ項を要求する場合に、「X は N+V だ」が可能になると説明されている<sup>17</sup>。

これらの例と先に挙げた影山 (2006) の外項複合語の例も含めて、由本 (2017) では、「X は Y+V だ」が可能なのは杉岡 (1998) の言う内項と付加詞の区別というよりも、「叙述対象となる項が述語名詞に受け継がれていること (p.277)」という条件であるとされている。

さらに由本 (2017) は、この項の条件以外に意味的な条件があるとして次の対比を挙げている。

- (41) a. このホテルは安藤忠雄氏設計です。  
b. \*この論文はチョムスキー引用だ。

まず、影山 (2008: 34) では Pustejovsky (1995) の語彙構造 (クオリア構造) におけ

---

<sup>17</sup> このように Y が N であり、N 自身が項を要求するタイプの名詞群(「色」「形」「目」「顔」「思い」「態度」など)は、誰が(または何か)を表す所有者が必要であり、それらが主語として現れるものである。このうち、「色」「形」「姿」などの名詞群を、小野 (2014, 2020) は「形質名詞」と呼んでいる。由本 (2020) ではこの用語を用いている。

る操作を仮定し、「ホテル」は「誰かが設計する」ことがその意味の一部として主体役割 (Agentive role) に含まれていて、「安藤忠雄氏が設計 (する)」が履歴として組み込まれ属性解釈が得られるとする。(クオリア構造は影山 (2008) より。)

(42) クオリア構造の 4 つの役割<sup>18</sup>

- a. 形式役割 (Formal Role) = その物の外的な性質
- b. 構成役割 (Constitutive Role) = その物の内的な構成、内的な性質
- c. 目的役割 (Telic Role) = その物の本来的、恒常的な機能や使用目的
- d. 主体役割 (Agentive Role) = その物の成り立ちや出処

これを踏まえて由本 (2017) は、「論文」については「誰かが引用する」ことがその主体役割に含まれていないので、引用の履歴があっても組み込まれることが容易ではないと説明し、次の意味的条件を加えている。

(43) 複合名詞が表す事象が、叙述対象名詞のクオリアに含まれる情報をより特定したり、豊かにしたりするものとして組み込まれ得る場合は、属性を表す述語名詞として容認される。

(由本 (2017: 277) 下線は原文)

前述の項の条件とこの意味の条件を満たして初めて「X は Y+V だ」が可能となるということである。

---

<sup>18</sup> Pustejovsky (1995) の定義を以下に挙げる。

Constitutive role: the relation between an object and its constituent parts;

Formal role: that which distinguishes it within a larger domain;

Telic role: its purpose and function;

Agentive role: factors involved in its origin or “bringing it about”

(Pustejovsky (1995: 76))

由本（2017）は影山（2008）の分析に基づき、クオリアを用いて「輪切りの大根」と「箱入りのりんご」を分析している。まず、両者ともに主体役割に「輪切りにする」「箱に入れる」の LCS が組み込まれる。結果状態を表す「輪切りの大根」の場合、その組み込まれた LCS の State の部分が「輪切り」の形状を表し、形式役割にその情報が付与されて、(44)のようになる。一方で「箱入りのりんご」の場合は、「箱」「りんご」も動詞「入れる」の項であり、主体役割に組み込まれた「入れる」の LCS の State の部分から、構成役割に「箱入り」の情報が付与され、(45)のように分析される<sup>19</sup>。

(44) 「輪切りの大根」

- ・形式クオリア：野菜(y), shape 円形 ←
- ・主体クオリア：[ x CAUSE [ y BECOME [ y BE [ AT z=輪]]]]

(45) 「箱入りのりんご」

- ・構成クオリア：be contained in (y, z: 箱) ←
- ・主体クオリア：[ x CAUSE [ y BECOME [ y BE [ IN z=箱]]]]

（由本（2017: 278））

ここで「卵の厚焼き」節の分析に入る前に、由本（2017）で新たに追加された例において「卵の厚焼き」節が可能か見ておく。まず(46)のように三項動詞の場合は、次のような例が可能である一方で、(47)のように、N 自身が一項追加する場合は、難しいように思われる。

---

<sup>19</sup> 由本（2017）における(44)と(45)のクオリア構造の表示は重要な点の概略を表したもので、クオリア構造の全てを表しているわけではない点に注意されたい。本稿におけるクオリア構造の表示もこれに準ずる。

- (46) a. 太郎はパンケーキのシロップがけを食べた<sup>20</sup>。  
 b. 太郎はピクルスの瓶詰めが好物だ。
- (47) a. \*太郎はスプーンの手割れでコロッケを食べた。  
 b. \*太郎はカードの期限切れにはさみを入れた。

次節にて、(46)の例に対しては「箱入りのりんご」の分析を、そして、「トマトの輪切り」に対しては「大根の輪切り」の分析を、それぞれ適用した分析を試みる。

#### 4. 2 「卵の厚焼き」節の分析

まず「X の Y+V」が可能なものには以下のタイプがあった。

- (48) a. 太郎は卵の厚焼きを食べた。 Y が「結果状態」  
 b. 太郎は魚の天日干しを食べた。 Y が「道具」  
 c. 太郎はパンケーキのシロップがけを食べた。 Y が内項（三項動詞）

クオリアとの関係で見直すと「卵の厚焼き」「魚の天日干し」「パンケーキのシロップがけ」はいずれも、その「卵」「魚」「パンケーキ」のできる過程の調理方法などの動作である「厚く焼く」「天日で干す」「シロップをかける」を通して出来上がるので、(49)~(51)のように、これらの調理過程はどのようにしてそれらができたかを表す主体役割に組み込まれるのが妥当であろう。そして、形式役割における姿や形や色などを、その主体役割の LCS の下線部の State から「厚い状態」「干されて（乾いた）状態」を読み取って、その情報が形式役割に付与されていると考えられる。また、「パンケーキのシロップがけ」については「箱入りのりんご」のように、「パ

<sup>20</sup> 「X の Y がけ」は「Y を X にかける」であり Y はヲ格の対象に当たる項である。同様のタイプとしては、「X の Y のせ」「X の Y 和え」などがある。例として「パンケーキのイチゴのせ」「ほうれん草の胡麻和え」がある。

ンケーキ」の構成役割に「シロップがかかった状態」を読み取って、その情報が付与されていると考えておく。ただし、「シロップがけ」の「シロップ」は、「りんごの箱入り」とは動詞に組み込まれる要素が異なり、「りんご(y)を箱に(z)入れる」のニ格で着点の z 項ではなく、「シロップ(y)をパンケーキ(z)にかける」のヲ格であり対象の y 項に当たるので、(51)はそれを反映した LCS になる。

(49) 「卵の厚焼き」

- ・形式役割：卵(y), 厚い ←
- ・主体役割：[ x CAUSE [ y BECOME [ y BE [ AT z=厚い ] ] ] ] ]

↑  
「卵を厚く焼く」

(50) 「魚の天日干し」

- ・形式役割：魚(y), 干された ←
- ・主体役割：[ x ACT ON y (WITH 日)]CAUSE [ y BECOME [ y BE [ AT z=干された ] ] ] ] ]

↑  
「魚を天日で干す」

(51) 「パンケーキのシロップがけ」

- ・形式役割：パンケーキ(z)
- ・構成役割：パンケーキ(z)にシロップ(y)のかかった ←
- ・主体役割：[ x CAUSE [ y BECOME [ y BE [ WITH z=パンケーキ ] ] ] ] ]

↑  
「シロップをパンケーキにかける」

これらはいずれの例においても「X の Y+V」の X (LCS においては y 項または z 項) が V の項となっている点で、前述の由本 (2017) の項の条件を満たしている。

また、(43)の意味的な条件については、Y+V が表す調理法が主体役割の LCS に表され、それによって、X である「卵」「魚」「パンケーキ」のクオリアの情報（形式役割や構成役割）をより特定したり、豊かにしたりしていると言え、この条件を満たしている。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では「卵の厚焼き」型表現（「X の Y+V」）を「たて」節および主要部内在型関係節と比較し、そこに主語と述語が関与していることを示した上で、伊藤・杉岡（2002）の分類と由本（2017）による動詞由来複合語のタイプごとに、「卵の厚焼き」型表現が可能かどうかについて観察した。「X の Y+V」において Y が「結果状態」か「道具」、または Y が三項動詞（V）の内項の場合にそれが可能であった。そして、由本（2017）のクオリア構造の分析を用いて「卵の厚焼き」型表現の分析を試みた。動詞（V）の LCS が X の主体役割に組み込まれ、由本（2017）の項の条件と意味的条件を満たしているときに、「卵の厚焼き」型表現が可能になっていると論じた。

残る問題としては、由本（2017）の項と意味の条件を満たした「X が Y+V だ」が可能なタイプにおいても「卵の厚焼き」型表現が可能な例と不可能な例（「\*スプーンの先割れ」など）が見られ、それが何故不可能なのか、さらにどのような条件がかかっているのかを説明する必要があるが、今後の課題とする。

## 参考文献

- 藤巻一真（2018）「アスペクト形式の「たて」と「かけ」の名詞的用法について」  
『神田外語大学紀要』30: 93-113. 神田外語大学.
- 長谷川信子（2002）「主要部内在型関係節：DP 分析」*Scientific Approaches to Language*  
1: 1-33. 神田外語大学言語科学研究センター.

- Harada, S. I. (1971) *Ga-no conversion and idiolectal variations in Japanese*. 『言語研究』 60: 25-38.
- 伊藤たかね、杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』 東京：研究社.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 東京：ひつじ書房.
- 影山太郎 (2006) 「外項複合語と叙述のタイプ」 益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編) 『日本語文法の新地平 1』 1-21. 東京：くろしお出版.
- 影山太郎 (2008) 「属性叙述と語形成」 益岡隆志 (編) 『叙述類型論』 21-43. 東京：くろしお出版.
- 影山太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」 『言語研究』 136: 1-34.
- Kishimoto Hideki (1996) *Split intransitivity in Japanese and the unaccusative hypothesis*. *Language* 72: 248-286.
- 岸本秀樹 (2000) 「非対格性再考」 丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他交替』 71-110. 東京：ひつじ書房.
- 金水敏 (1994) 「連体修飾の「～タ」について」 田窪行則 (編) 『日本語の名詞修飾表現』 29-65. 東京：くろしお出版.
- 黒田成幸 (2005) 「主辞内在関係節」 『日本語からみた生成文法』 169-235. 東京：岩波書店.
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」 益岡隆志 (編) 『叙述類型論』 3-18. 東京：くろしお出版.
- 三原健一 (1994) 『日本語の統語構造—生成文法理論とその応用』 東京：松拍社.
- 西尾寅弥 (1961) 「動詞連用形の名詞化に関する一考察」 『国語学』 43: 60-81.
- 小野尚之 (2014) 「「N をする」構文における項選択と強制」 岸本秀樹・由本陽子 (編) 『複雑述語研究の現在』 27-40. 東京：ひつじ書房.

- 小野尚之 (2020) 「軽動詞構文における強制と共合成—「する」と「ある」をめぐって—」由本陽子・岸本秀樹 (編) 『名詞をめぐる諸問題—語形成・意味・構文—』 88-108. 東京: 開拓社.
- Pustejovsky, James (1995) *Generative lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 杉岡洋子 (1998) 「動詞の意味構造と付加詞表現の投射」『平成9年度 COE 形成基礎研究費 成果報告 (2) 先端的言語理論の構築とその多角的な実証 (2-A)』 341-363. 神田外語大学.
- Sugioka, Yoko (2001) Event structure and adjuncts in Japanese deverbal compounds. *Journal of Japanese Linguistics* 17: 83-108.
- 高見健一・久野暉 (2006) 『日本語機能的構文研究』 東京: 大修館書店.
- Tonosaki, Sumiko (1996) Change of state head-internal relative clauses in Japanese. 『言語科学研究』 2: 31-47. 神田外語大学大学院.
- 山田昌史 (2005) 「結果の焦点化: 「たて」構文の分析」『レキシコンフォーラム』 1: 267-293. 東京: ひつじ書房.
- 由本陽子 (2017) 「事象から属性へ—日本語の動詞由来複合名詞の述語名詞用法について—」西原哲雄・田中真一・早瀬尚子・小野隆啓 (編) 『現代言語理論の最前線』 263-279. 東京: 開拓社.
- 由本陽子 (2020) 「日本語の「名詞+動詞連用形/形容詞」型複合語形成における「形質名詞」の役割」由本陽子・岸本秀樹 (編) 『名詞をめぐる諸問題—語形成・意味・構文—』 47-67. 東京: 開拓社.